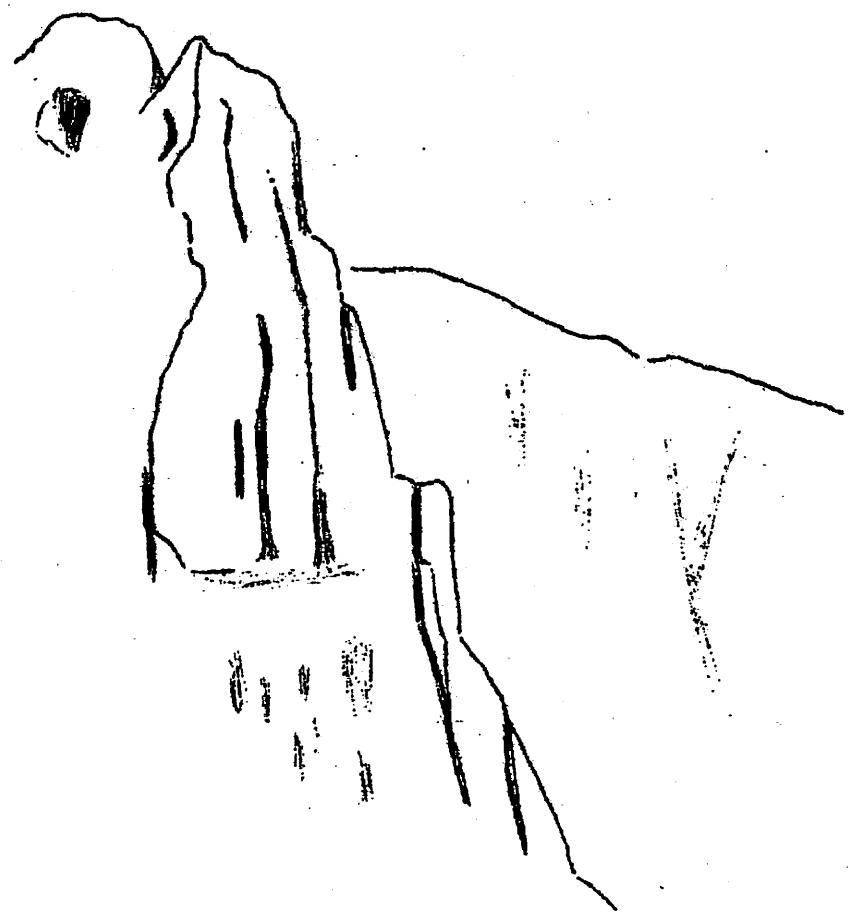


富士

昭和 40 年度秋山合宿
報告書



信州大学山岳会
伊那松本山岳部

秋山合宿を振り返って C.L. 西阪幸

岩登りを主体とした今回の合宿は岩登りの点においても、又その他の一般的な面に於いても満足ではなかったと思う。即ち学校で言えば落第である。落第の原因となった課目を掲げると。

①十分な各場合宿をならなかった。

の上級生の不足

②新雪の為

③中堅寄貢の効率不足

④入山前の伊那・松本間の連絡不足

⑤中途の入山・下山の不明確な点

⑥冬・春山合宿計画が未定

⑦長野山岳部との連絡不足

⑧寄貢全體にみられるスタミナ不足

等がある。これに多少の説明を加えると

① 次に掲げてある行動表を見て、もろとも3種類の合宿の前半期に上級生の絶対数の不足があつた為、正味6日間の合宿であり乍ら、又一方予想以上の新雪が有った為に、当初考へていた計画の半分を達成出来なかつた。

② 1)に述べた如きを繰り3種類の中堅寄貢たる2・3年寄貢のいつも変わぬ不動感振りは、大いに攻められるとと思う。岩場の概念はもとより一般ルートでさえ不確かな者、又更にアバランチの発達をしなかつた者等が多かつた。これらの人々が来年一部を引ひながら行くのだから、今一つの努力が欲しいと思う。

③、④ これは又々伊那松本間の連絡不備の点が出ていた事だが、今回は試験用意もしていかず、2)の条件もさることながら、小生も十分注意していかれかねらず十分でない。又途中下山の理由も明確でなく(小生には)途中下山の者も予定日を過ぎる等は、個人の自覚を再認識して致したい。

⑤ 今回の合宿に関しては屏風登攀後の裏が出来ていたので、ビバークの用意もしていかず、2)の条件も重なって出せなかつた。もし、今回の合宿までに、冬春の計画が多少なりとも具体化されていたら、今こそし色氣のある岩登りも出来たと思う。

⑥ これについては、10月3日に1年の衆の退屈のPartを倒し始めのところは一応達成されたが、但々々の交わりも一部だけであった。Leader 同じく毎回

打ち合せをしなかったのは切角、天井場を隣りたしから、物足りなかたと思う。

⑦) 試験後と言ってしまえばそれまでだし、又靴ズレその他の条件を述べてしまえば元主子をなく、小学生より、上級生、下級生に奥りなく；スタッフ不足であった事は、冬、春を前にしても、又山に入ると云う事ださを考へても今少し反省したい。

以上、小学生の気の付いた事を大ざっぱに上げましたか、これについて、総会なり部会の席上で話し合って頂いてその原因を明らかにし、対策を考えてもえればと思います。又、これらとは別に各人各様の意見もあると想いますのでその点についても、同様に皆んなで考えたいと思います。最後に、この会宿が期待していた様には旨く出来なかつた事を Leader としておわびすると共に、色々な悪条件が重な、たたき扱めらざ事故なく終、左事は内心喜んでいます。

II 期日

1965年9月29日～10月6日

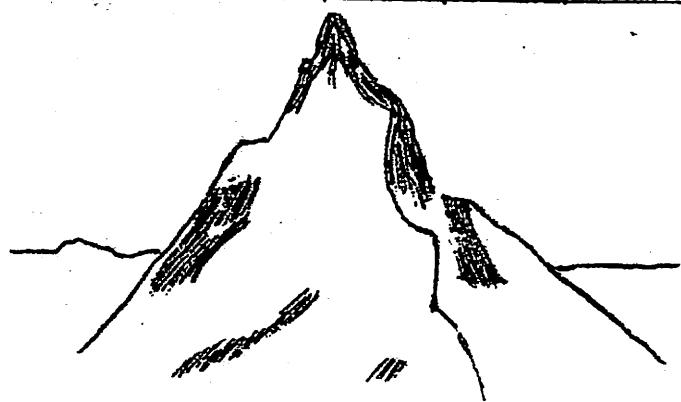
III 参加メンバー、及び係

西郡 光昭
真野 孝一
川治 晴彦
C.L. 西阪 孝子
小川 勝剛
新谷 利勝
S.L. 岡村 知彦
会計 福原 正昭
装備 中村 洋
牧 晃一
医療 井上 紀樹
記録 小松 純一
食糧 小出 元
金子 鉄男
明顕 介信
扇能 清

木下 盛弘
山林 幹夫
佐藤 後彦
内藤 精二
古川 三郎
村田 譲治

IV 仁人別行動予定表

	9/29	9/30	10/1	10/2	10/3	10/4	10/5	10/6
西郡			入山	北2尾根	D-4中央稜	飛ヶ尾根	三峰Footh	下山
真野					入山	東北稜-西2尾根	扇の頭	下山
川治			入山	横尾本谷	北尾根	B-A	奥又	下山
西阪	入山	北木東稜	北尾根	扇の頭	奥又	三峰リッヂ	北2尾根	下山
小川	入山	北尾根	東稜	北壁	横尾本谷	B-A	北2尾根	下山
新谷			入山	北2尾根	D-4中央稜	西木	飛ヶ尾根	通次
岡村	入山	北尾根	東稜	横尾本谷	東山筋	西木	三峰リッヂ	奥又
福島					入山	東北稜	東2尾根	下山
中村	入山	北木東稜	北尾根	横尾本谷	東	波		下山
牧	入山	北尾根	東稜	北壁	東北稜	西2尾根	五峰先手	東北稜
井上			入山	扇の頭	北尾根	東北稜	西2尾根	三峰Footh
小松	入山	東稜	北尾根	横尾本谷	奥又	五峰先手	扇の頭	下山
小出	入山	東稜	北尾根	扇の頭	北尾根	五峰リッヂ	奥又	下山
金子	入山	北尾根	東稜	扇の頭	横尾本谷	B-A	奥又	通次
明誠	入山	北尾根						
扇能	入山	東稜						
木下	入山	北尾根	東稜	横尾本谷	北尾根	三峰リッヂ	扇の頭	下山
小林	入山	北尾根	東稜	扇の頭	横尾本谷	B-A	奥又	下山
佐藤	入山	北尾根	東稜	横尾本谷	奥又	西木	北2尾根	下山
内藤	入山	東稜	北尾根	横尾本谷	北尾根	西木	飛ヶ尾根	通次
吉川	入山	北尾根	東稜	横尾本谷	奥又	飛ヶ尾根	扇の頭	下山
村田	入山	東稜	北尾根	扇の頭	横尾本谷	西木	北2尾根	下山



V 行動

① 9/27 17:00 上級生 Meeting
20:00 All men Meeting } 於 新部室
そして以下の事を取り決めた。

雨具の用意を完璧にする。
上級生は、ビーチル、アイゼン等、降雪に対する準備、
並びにビューアークの用意をする。

1年生に対する指導としては、この合宿では特に慎重な行動をしてもらう。

岩稜歩きの際草を落石しない様注意
また雪かかった場合、必要な行動のレベルを落す。

岩登りの指導としては、三点確保、ザイパンツ等を徹底させよ。
更山合宿の反省に出たアートワークの悪さ、精神力の弱さをこの合宿で改善してもらう。

② 9/29 Get up 4:00 天気 晴

Eaten 4:30

学校出 5:00 — 上高地出 8:50 —

朝神 9:40 — 横尾大橋 10:00 —

横尾大橋 2:05 — 通達 4:30

③ 9/30 天気 晴

1) 北穂東稜 Party

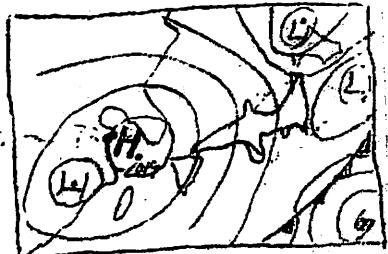
T.S 6:40 — ゴルジュ上のガレ

7:15 ~ 7:30 — ゴジラの背手前

— 北峰 9:50 — 南峰 10:15 ~ 45

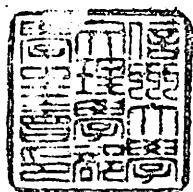
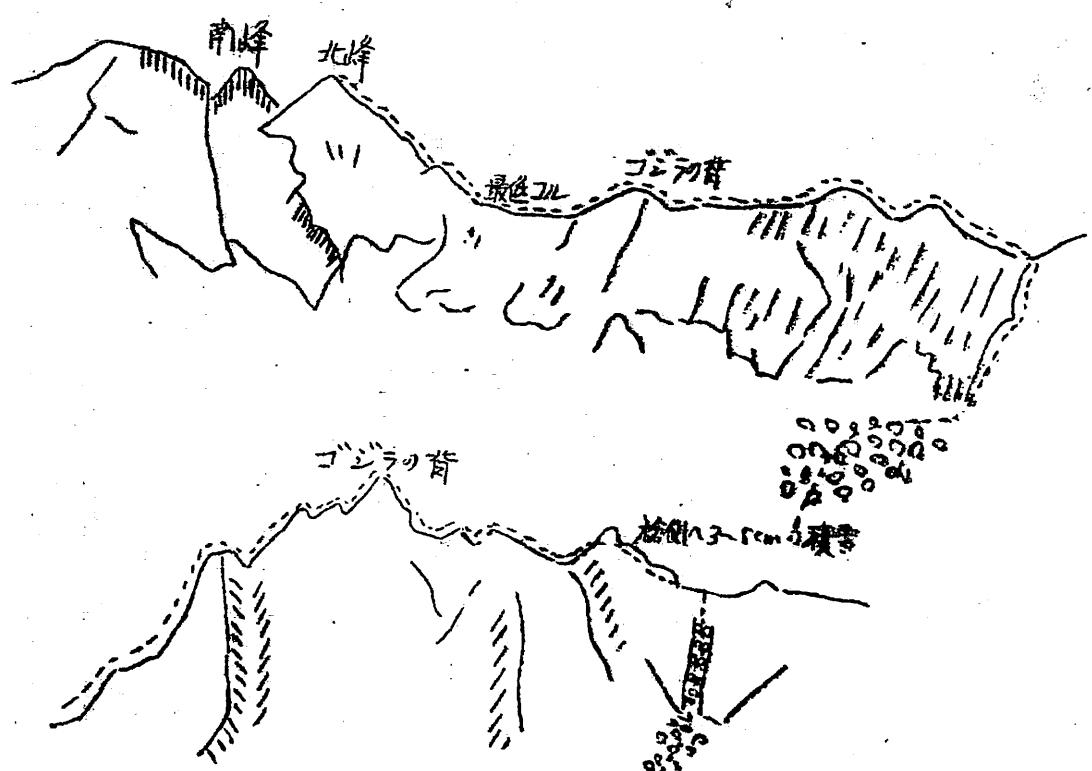
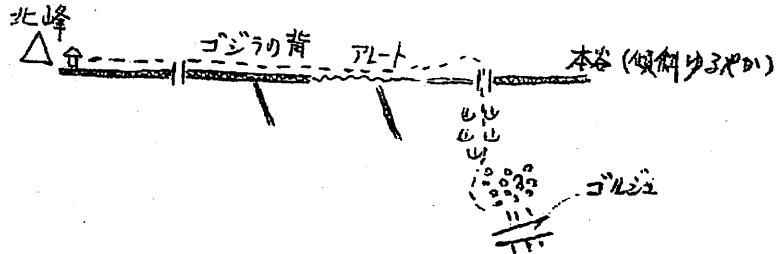
唐沢越 11:35 — 唐沢岳 12:20

穂高岳 12:30 ~ 1:05 — T.S 1:45



岩には雪がついていて、つるつる滑りバランスを乱されて滑り出した。過去に一度
五竜岳でもこの布場所を通った事がある。その時もきびしかったが、今度
やはりきびしい。同じ模様でも更に新雪についているのとでは全然異なる。
思ひも足かずくんでしまい、早く通過したいとそればかりを思う。
身体の不調が災いでから、人の距離がしばしば離れた。追いつこうとも
足が進まない。やがて追いつくと、多く登りで離される。高木君の登り口について
はまどりした。地下足袋をはいて行った。高木君、まひ(そうだつをな)、取れ
あれだけ雪がついているとは知りません。サテックラードの、一見

快調そだつたが、ヒザは焚けし 瓜先は角いし さえなかつたぬ。でも皆 天場へ到着した
時おほとしよ。全員無事であつた。喜ばしまかぎり (記 小松)



2) 北尾根 Party

T.S. 5:45 — 五六のコル 6:40

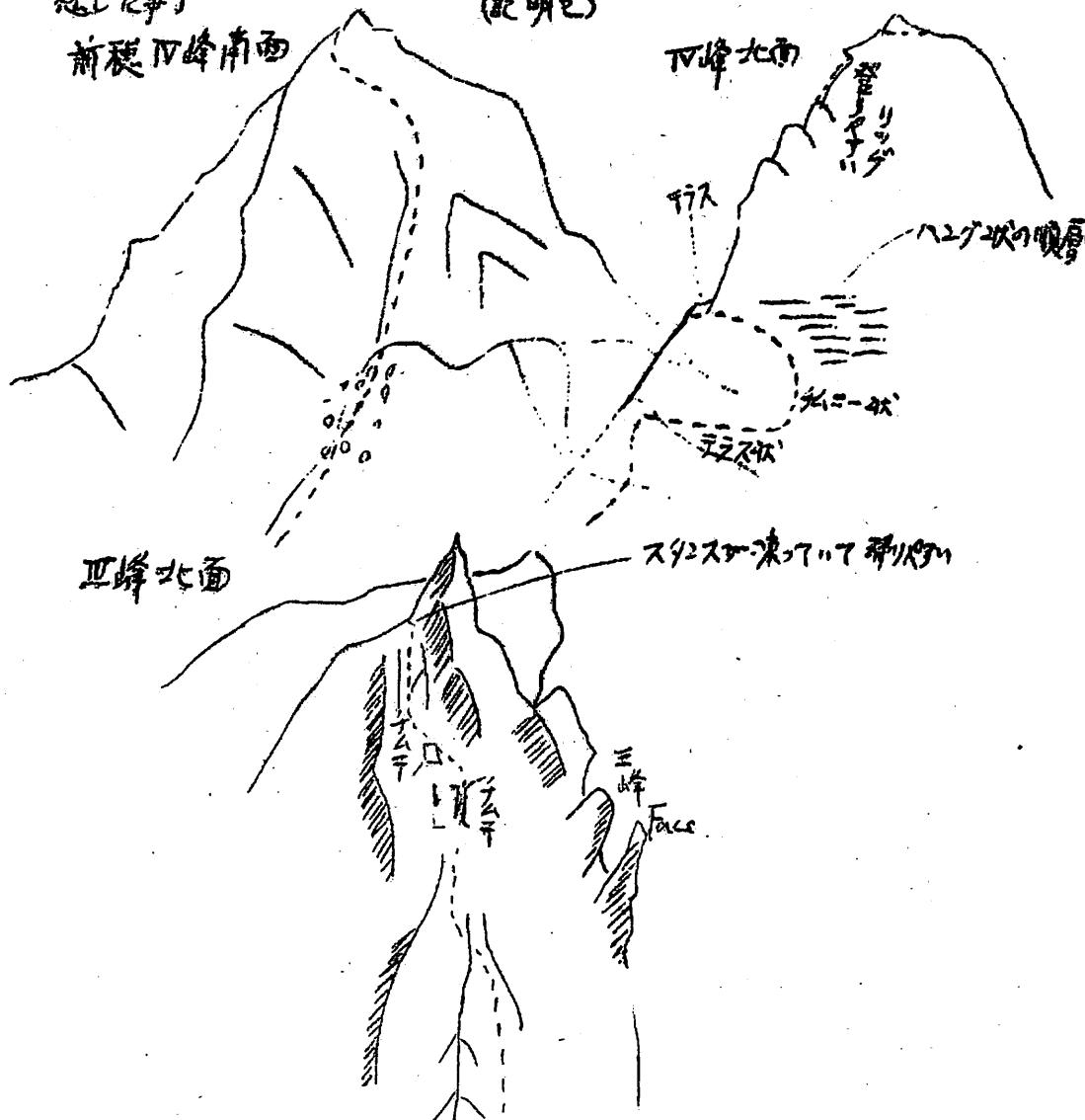
— 前穂 P 11:10 — 奥穂 P 12:30 — T.S. 14:35

初めての三回目で来て見るものすべて珍しかった。今日の北尾根の様に雪のついた稜線は新人合宿の西穂の時と今回と2度目だりなので注意していたか 2.3度の失敗があった。今日の北尾根の中では特に3峰にありて最後の奥又側へ出る所がショッパクで一番こわかった。

今まで数回の Chance がありながら登れなかっただ穂高の Peak である前穂の Peak に登ってもあまり感激はないかった。

むしろ北尾根を通れた事のほうがうれしかった。北尾根からの奥又の池は思っていたより大きく日光を反射してきれいだった。

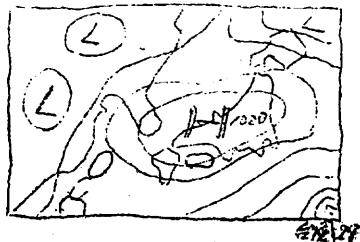
雪があったためか高揚感がなくなっていた。(奥又側と三回目側を見くらべてみて感じた事) (証明)



・10/1

① 東稜 Party

T.S. 6:20 → フジラク前 8:30 → 北峰 9:05
→ T.S. 13:15



昨日行った北尾根は1度行ったので、少しは分っていたが、今日行く東稜は全くの未知であった。1ピック目は足が重く何處か歩き難い気持であった。

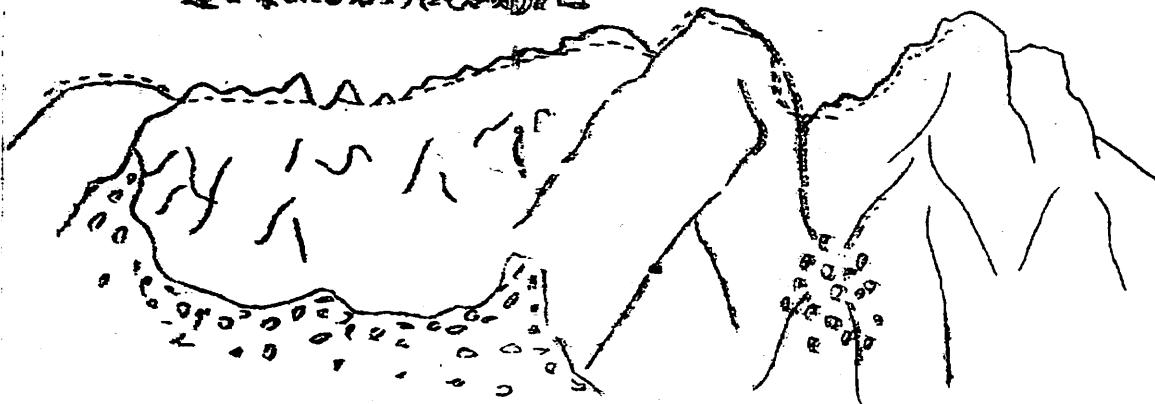
ゴジラの背たてヒットでから狭調になって来た。(歩き木立アシ) いつもの事だが登りは良いが下りのイヤな事、仲々事、山で下りかないたらこの上ないのだとと思う。

東稜の登りは雪が多く重くスリップする。東稜の頂上から遠景を見たか何となく暗くイヤな感じでした。

最後は笛を立てる。乾燥度の悪さに注意しないといけない。(完木下)

北稜 Peak より鹿伏岳の手前

- 残雪壁にペトリ雪サッパで3度も登る。通路平均50cm位。
- ルートを示す矢印などほとんど書いてある。
- 通路はほとんど右より(残雪側)傾いて



② 北尾根 Party

T.S. 6:25 → 西大の池、一ノ峰 7:30 → 三峰P 10:00
→ 前稜P 10:10 → 奥稜P 11:45 → T.S. 13:40

三峰のチムニーでは前に1partyいたのでチムニー内での会合が失敗された。連れて行っている上部の通り道を歩いていく。どうぞ霜が釐かいせいか得たてではライライしてくる。しかしチムニーとその上の大斜面ルートは雪が融け登り甲斐のある所。雪がつき凍っているので滑りやすかったが北尾根では一過ぎりと思つた三峰への登りであった。奥尾根を通り奥稜までは日中当りが少なくて汗をかいてしまった。その上奥稜の下りではスリップをして雪をすりこぼすと雪がちならない降りれぬほどいくととき欠水の硬さを感じ取られた。昨日に続き今日もまた状態こり調子では1週間バッタリ登れや...と思うのはよく良い調子かもね! 由於岩は今日も調子が悪い所だったし半分以上ノドガホリといふ...でも今日のアシストはヨードいいだと思つた。(完内ト)

○後発 Party

Get up 4:30

上高地 11:30 → 明神 12:05 → 德次郎 12:35

→ 模尾 1:45 → 本巻の橋 2:55 → 2回目

• 10/2 天氣 晴朗

Get up Essen 4:25
Alleman 5:00



リ屋八の頭 Party

TS 6:30 → 最佳时机 6:55 → 屏风颤 6:40 →

10峰 $P = 25$ \rightarrow 11峰 $P = 30$ \rightarrow T.S. 12:35

前回の豪雨の殘つている橋を重い足取りで最低コルへと向る。西沢ヒューテの
解説から遙か分れ北尾根の基部をトラバース。殆んど登りもないのだろうと思つ
たが、藤森へ出て5分程で最低コルに達する。ここからは登一辺であるが
切れる。藤森へ出て5分程で最低コルに達する。ここからは登一辺であるが
コルからの眺めは良く又白谷から眼下に鎌倉の街をつけていい。去年より一般化
された又白谷から最高コルを経て西沢へ行く道は、途中からブッシュの中に
土れた又白谷から最高コルを経て西沢へ行く道は、途中からブッシュの中に
見えなくなっている。コルへの途中、ニセの頭と云うのがあり、そこを下つて
本當の頭から下つて来る長野のゴト衆に出逢つた。出發する時、トラバース道
を登っていた連中だ。頭からは西沢、横尾本谷が一望のひと。槍サボンと空穴
で出して身を抱いている。横尾尾根は、あの春の苦しきを全てハイマツの
じゅうたんの中た埋めていた。あそこで5日間も沈黙をくらした。今
一休みした後北尾根へ向る。同じ尾根でも上部は厳しい岩稜であつた。

下部はブッシュの中を道を切り開いていた。今日はこの道ではしない。
空へ向っています。汗をかいて八峰に達したが、からの奥穂高の山は良い。
後は、途中で一度また道をだまされた以外は何と云ふ事なく、五、六のコルより
天場へ帰った。

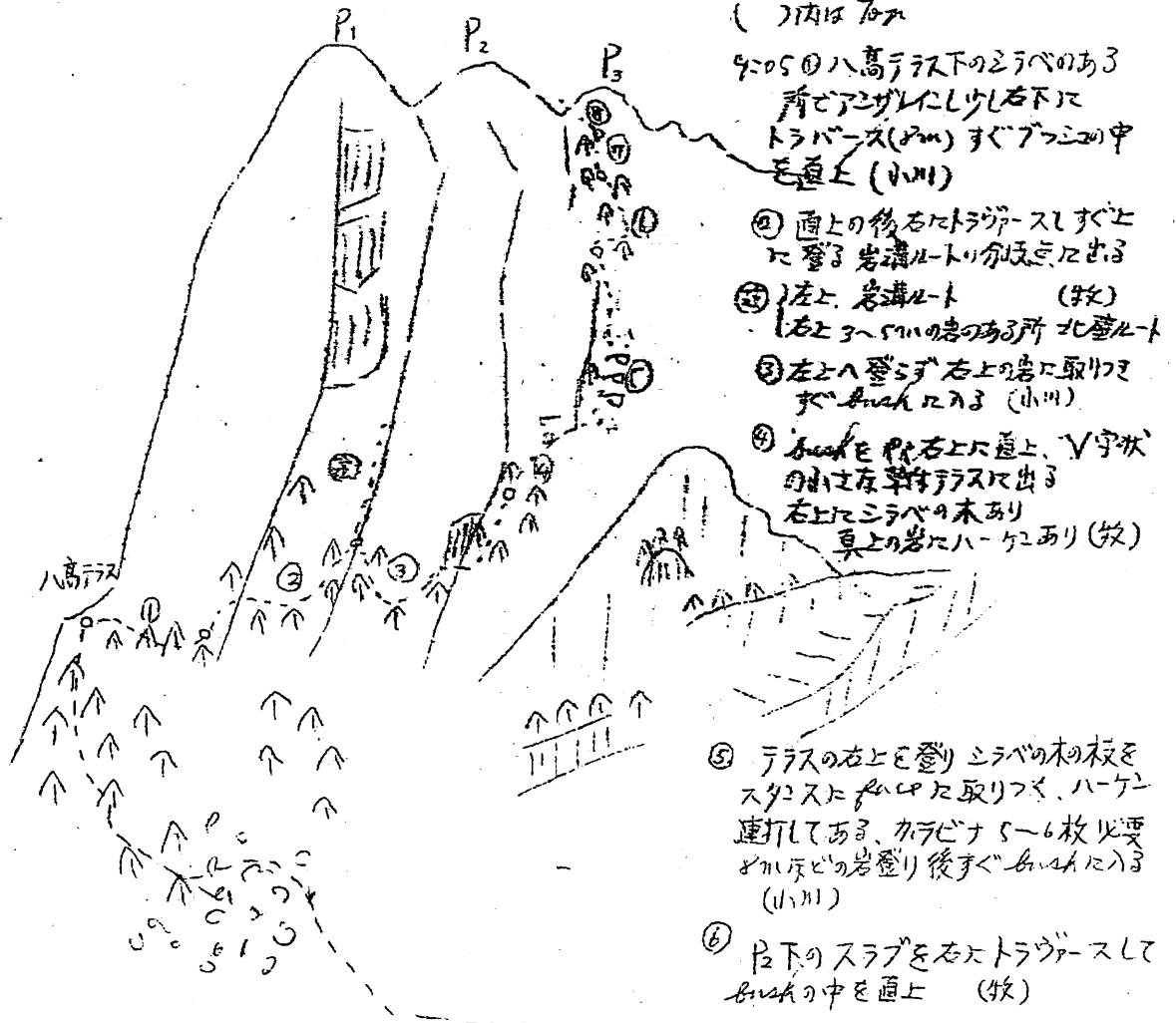
2) 横尾本谷 Party

いつもながらの穿着の悪さに悩まされ、うつうつしきりを切られていた。
外はまだうす明りである。昨日より早い。もう2~3時迄寝ていたい。
朝飯を半分しか食えず、全くやり切れない気持だ。
出発6時5分、3回次下りの途中から道をはずめ、大きい石をゴロゴロしていく。
河原に出る。本谷のキレット沢は水が豊富である。流れを右手たぐから沢を
つめる。出合より10分程して左の沢へ曲る。水は少くある。足場は急斜面で滑りで
なっていて、ザザザ崩れる。石もコロン、コロンと落し始めると落さない様に慎重に
歩くのだがやはり落す。何時迷走されるとヒヤヒヤ歩くのは全く身の繪み思いでね。
しばらくすると前オハ雪渓が見えてくる。その少し上の岩壁に白糸の根を遠く見えた
時、誰もかほっと気持ちがなぐれた事である。左のスカイゲーリーの岩壁から小さい
落石を気付しながら細い沢を登り切る所でパン。
ノドのカラニカラニに乾いている状態ではパンも食べられない。水を飲んで
気を取りをどしたところであたりを見渡せば、今登って来た次の方向に扉門の
様ツラの紅葉が美しい。キレットに向かって玄ミとしたガラス場が空虚たのむ。
その二つの雪の跡か。た山はまた不気味に連なる。最後のガレを登り切
った所でキレットに出る。川サウセ来る。シャンパーを着、手袋をせめ、パンをしめ
なおす。雪の凍った岩壁を登て北穂高岳へ。日焼け岩筋歩きの訓練の
注意を思い出しながら慎重に一步一步出す。途中壁を登っている5~6人の
Partyを見る。いつも見てもうとすると光景だ。無事Peakに出る。時まだ10時頃
パンを2枚食べ垂涙とはれこんだサバ用をあて食べて残りなかつた。
頂上は若い男女でにぎわっていた。写真をバチバチ取り合っている。我像
したら真黒だったと云ふ事でなければ面白い。今日は岩にバリカセてこなした。
オニ尾根で北穂の岩を見てから南壁を下る。山の上で登ったからだけ降
りなきれば仕様ないか、降りる時はいつでもいやなものだ。
足をガツガツして来る。テント場に帰り、今日一日の行動を回想するのもまた
良いものである。
(記吉川)

3) 達谷オニ尾根 Party

西郡氏と行く。日当りの良い南稜を行く事1時間半で日の当らない達谷の
中へ入るのかと思うといささか、ゆううつ。幸いにも風はあまり強くない
つか、又日の明るさに比べると、めりい人うつである。
始めての達谷とて、いささか緊張したが、この二尾根は、本当に大した事ない
つた。主稜を下る事なし、北山稜のヒリつきは、赤幕ピナクルである。
主稜側にも、面白そうな岩壁があるたので、西郡さんは左、オレは右へと、道
分れて登りだす。ノーザイルでもヒリなくていい緊張感もなくPの登りた
かかよ、ここぞアソブレイする。2 pitch P2へでる凹角沢が少くないが
立派がない。P1たかの有名な水野クラックがある。クラックをめざして左せ
回して登る。30mのかたい快適なのぼりで立ち、後は何う心もなく
主稜線へ行く。
(記新谷)

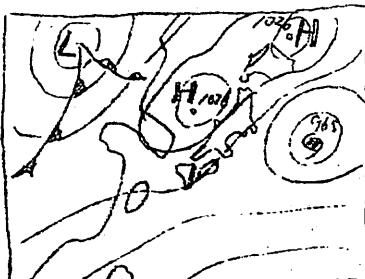
4) 虹ノ木壁 Party



12:20 ⑦ 右上にbushこぎで終了点に
到達する(小川)

13:15 ⑧ 1時間程bushの中をコネース
で登り北壁の登攀を終る
(走り 牧)

• 10/3 天候 晴
Get up Essen 4:30
All men 5:10



1) 北尾根混成Party

T.S 6:00 — 五六コル 6:45 — 四峰P 7:55 — 前穂P 9:15
— 奥穂P 11:00 — T.S 12:50

始めて長野の衆と一緒に山を行ったけれど別段どうということをなかった。
同じルートを一昨日行っているのでルートの事がよく分った。吊尾根はとても長く感じ
られた。奥穂の下りは雪が薄くていたとはいえ雪をかく事しまりでなかった。
連日の行動の為 (?) ヒザが痛かった。三峰のラムニーでは例の如く待たされ
寒風に身を震わせ、腰がいトラウマースの岩では下から見られていたので少々
気張りすぎた様だった。(記 内ト)

2) 横尾本谷混成Party

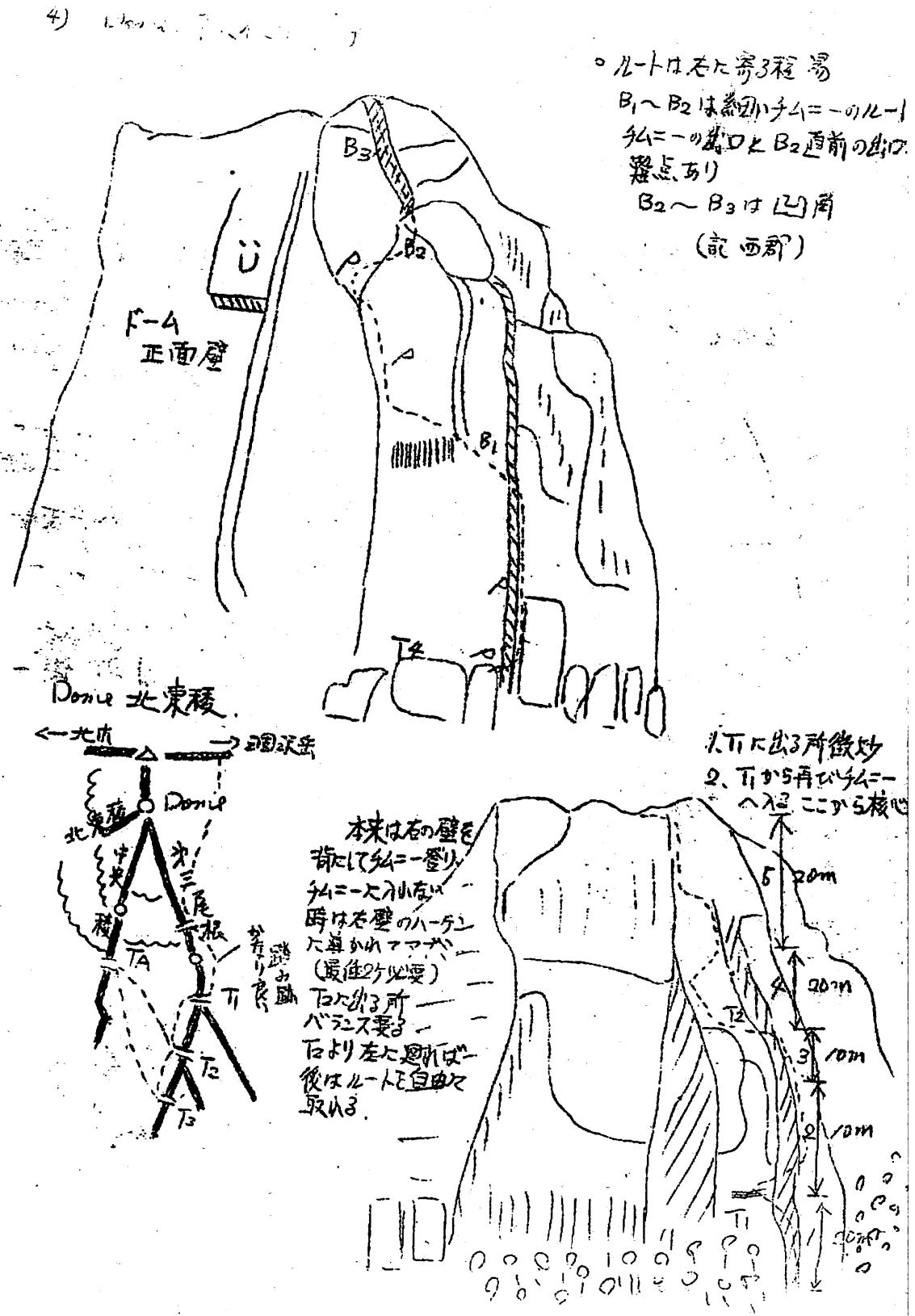
T.S. 6:00 — 本谷分岐 6:55 — キレット 8:45 — 北穂山荘 10:00
— 週次集会 10:45 — T.S. 13:00

長野から3人、松本から4人の混成パーティーで、横尾本谷よりサイクリング
まごをアタックする予定であったが、風が非常によく雪が吹いていた
週次側をまいてサイクリング下るのを止り週次集会よりありた。
人向的で走れないため、混成パーティーのかた苦しかった。
合宿5日目、歩いて回たすのほ、ガラガラの岩ばかり、又定着率が低く
写真も取れない遠景もなくなり、なたの合宿が終わると感じた。今日の行動
であった。しかしキレットより北穂山荘では風が強く大分むづがかった。
(記 村田)

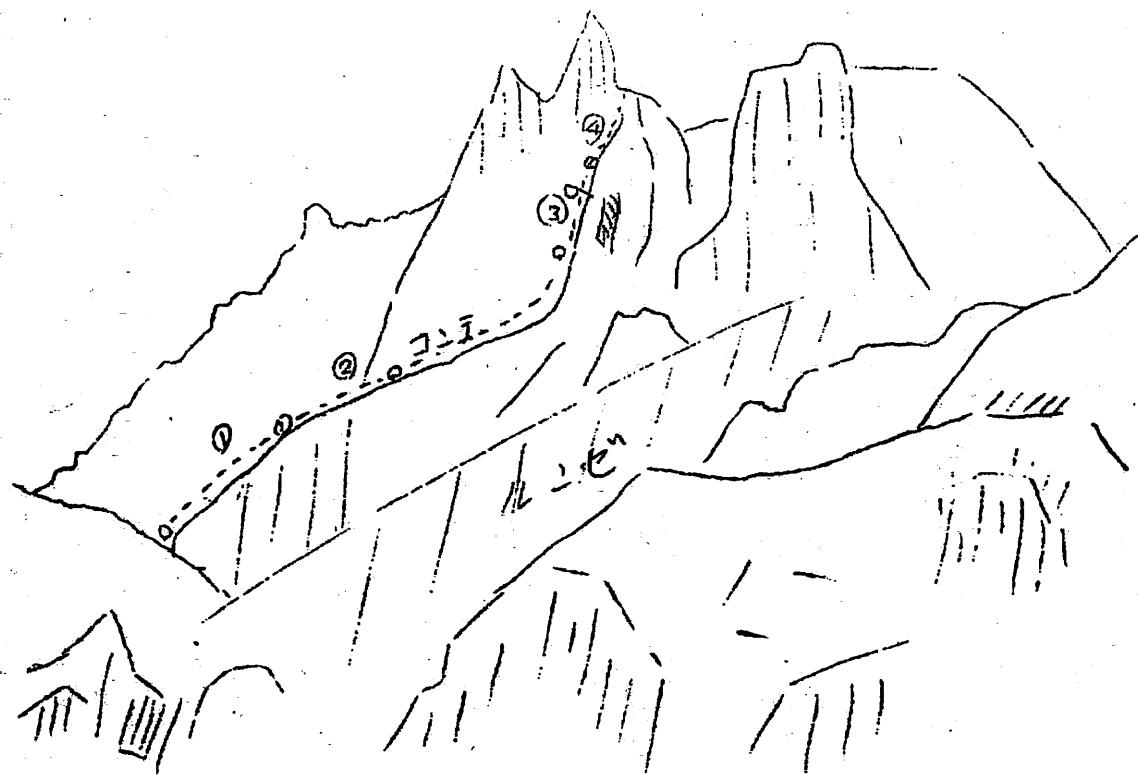
3) 奥又白尾根

前日ちょっと寝過の上遅かったので因ざあが悪い。今迄と違て長野との混成
で一つのパーティーを作った。奥又の池の上の小山で西夜さんから前穂の方
岩壁の説明と聞かれて大変プラスになつた。今日は五箇所のうち何が火ま
上り更根の上はたいへん寒い。ハスは走ったよりもラブ少く況か越辛で
切れてかなり段になつている。(しかもオロはボロボロの岩場となつていて)
A沢を登り下りた所から前穂
非常に傾いて登らなければならなかつた。A沢を登り下りた所から前穂
までは十分位で行けたが比較的奥又尾根に出る事ができただめ、樂い
山行であった。長野の人達とは、よく混り合ひ予測していくより良い結果と
言ふ。この様な事は今後ドンドンやるべきである。

(記 佐藤)



5) 奥不思議地図 Parasy



- ① リッヂたて登る
- ② リッヂの左側たて登る
ほどんどハーケンを使用せず
- ③ 15cmほど登ると面た face
右上に凹角があり共にハーケンが折れたり
正面faceを登り不安定な所でビレー
- ④ リッヂと石垣を登り終了点へ到る
後ろコニテご peakへ
(記載)

10/4 天候 晴

Get up 6:30
All men 5:00

リ奥穂東北稜 Party

5時55分、真野さんと朝済氣の中を出發。西郡さんと吉川の飛騨尾根 Party と後に到り先に来てザイテニに向って登る。ザイテニの取付きの所で一休憩してから彼等と分れる。俺た、お前ら来るまで待つていろでネ」と西郡さんは道を切り立から忍鳴ってよこした。
アンダマツの上部をトラバース、直登ルートの右側にはペラニヒしたスラブがある。これでもとスケールサウスをかいたらまた良い目標となるだろ。アズキ坂が大きくなる所から東北稜に取り付く。7時30分、ノンザイルで登り始めたが、日当りの鳥雪が重くなっている。ハ休、草が良い手がありえる。しかし少々しょせん寒の下に出たのがここでアニアレイ。

しかし 2 pitch 程でまたそこから今度はコニテ、ピナクル坂の上に来るとそこから下のツルまではアップザイレン、大きさを量を考慮して少し不安ながら下る。昨日の放送はこれから取扱いを始めたのだ。

コルで一休憩。8時20分、そこからすコニテでしばらく行くが、再び岩壁と本山。雪がついでいるので、スチーカートに切り替える。並んでこの道には、イフタケが非常に多い。ザイテニから見え隠えニーフライニーは左側に入る。ここには、貝左喜の写真形をしてハーケンが途中の左手に折れた。足とヒトのマークが付いている。去年の新人合宿で新谷さん達の作ったものなのだろう。初めはこのタグニーを古へ逃げようと思ったが、このハーケンで刺繡されて中へ入る。中程まで登って中がやまとなく死んで、パツツ。アンド、ニーをしようと思、走る。サ大変、背中のサックサが悪くてどうでも動きを取れず、反対にすり落ちる森林、石手のホールドーに全体重をかけて了為、度々手の感覚がなくて来る。何度も、そこでもがいたあげくようやくスタンスを取つたが、山でXはやはりやらかす難い。必死の思いで、タスカリスにハーケンを片手で下がりながら下り、ようやく手として握りとる。タグニーの出口にはすずりのタックストーン状の岩が乗っている。これを右を抜けてようやくこのタグニーからはい出し、そこより10mほど上へ冒険のガリーハ中でビレーピンを打つ。真野さんの上へ来ると待つ、もうすこり腕から力が抜けてしまって、これでシッヘル出来るのは全く自信がない。

かくなり時間ばかりで真野さんや廢を出したが、その時はもう零度にさらされ骨の髄まで凍くなってしまった。早く日当りに出たい。

今度は真野さんた7:00にしてもらい、そのガリーハ左手タリッヂを登って日当りに出てほっとし、かじり火を指を延ばし、後はコニテ"奥穂の門"まで、10時、門の東在りの所でパンを食ったが、向度もそこいらで止めて帰りましたと言いたいを事が、全くバテてしまい、これまで登った所もない全く自信がない。

結局あきらめてミヤコのヒグ尾根に向う。奥穂からの下りのイヤ守事。

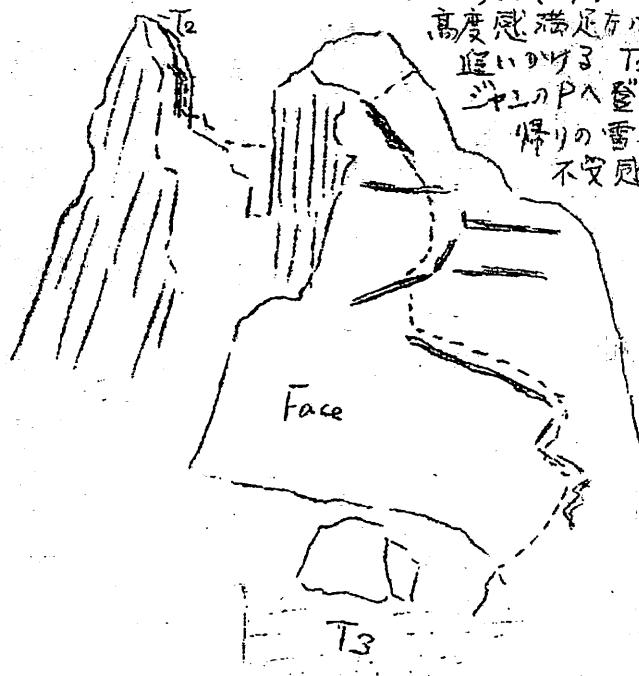
フラフラしていいから全くあいかない。

ミヤコの丘の登りにて、光復の急、ベットリ雪がついており、これまで下りたことはないが、今日は下りる所にてお邊を運び、

か歩きを下り、途中からヒダ尾根の腹の踏み跡が跡た入る。
T₂の所でコールをかけと何と敵の上で西郡さん等の返事をした、朝言っていた
様な、そこで僕達の行くのを待っていたのだ。

T₄まで下る。上に2 party 長野の衆かい。
ノニザイルで硬いミッカリをリップを快調にT₃までとばす。長野のマッケン
ハイマーにて進ひつて、T₃にて先づつくせ、そこで先に行つたら事にして、
登るのを見学する。

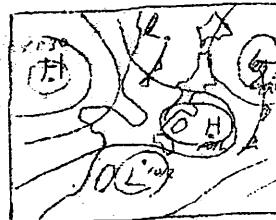
T₂からT₃へは下図のFaceとその左側のガリーニ
二つあるが、ガリのオは変な木立、スヌードルスがありそうだ。
高度感満足それでFaceを上トミヤシの後を
進いかけた。T₂から上は再び階段の様を登りて
ジユウPへ登って一休み。
帰りの雪上では、つくづくピッカルのない
不安感を味いたい。



T₃からT₂へは、クラック伝いに
Faceの中程まで登り、後は
フリックヨニEさかず。
またT₂直下の登りをやはりフリックの
大きい中尺もぐり奥のオのスタンスを
見つけたと乗であさ。
このクラックの上にピニカ1本あり
それを越すともうT₂であった。

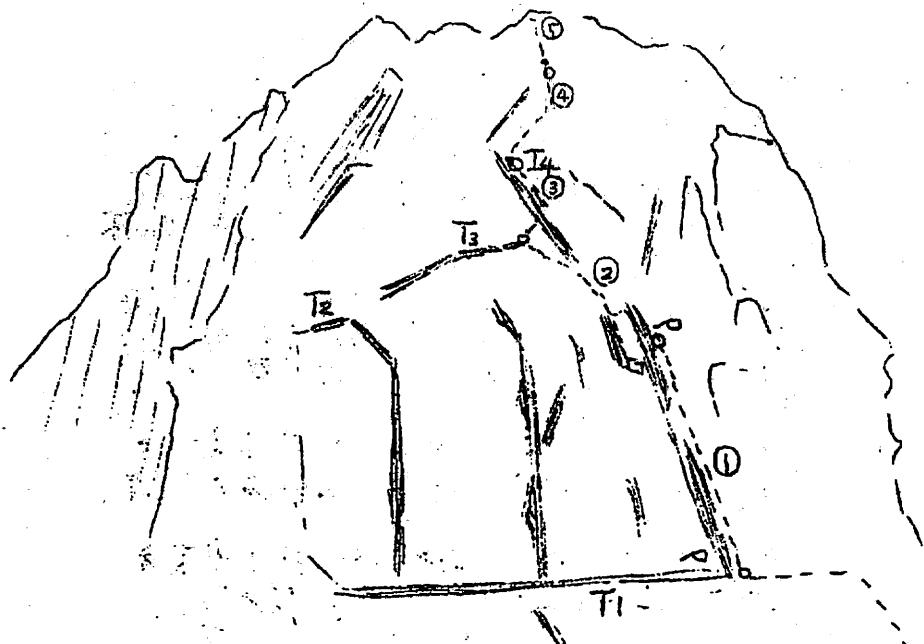
(記 サ上)

° 10/5 天候 晴
Get up Essen 4:20
All men 5:00



リ三峰 Face Party.

5時50分西郡さんと出発。今日は登から撤収するので、今までに標準にな
りねばならぬ登録は禁止された。
三四のコルメターケで登る。上部に、不鮮雪があり、キツ、ステップ等やらず。
7時30分取付点、落石を避け右手の丘状の上に出てスケーテ。
取付点のバードには雪かバッタリついており、Faceを何かイヤな感じ。
西郡さんと想ひかけ相手アの感覚なり。
三本のガリーニうち一巻左側のに取りつき、そこから下を所で1 pitch
二ヶリーニング所は、下の取り付けてすぐの所でスタンスを見つかる。
苦労してしまった。次のPitchは西郡さんに来てもらう。



ジーハル中に雪の上を坐っていた鳥ズボンがヌルヌル気分がすみや悪くなつた
帳調子Face登りた氣を取り直すT1に出てそこで中央のガリーガルスルトと
一縦になる。再びガリーガリの中に入らずすぐ抜ける。
このガリーガリは短いが、身体が完全に飛び出してしまふ様を感じさせ、ホールド、
スタンスをしっかりしているのでまあ安心である。
それ以上はそれ程の所もないので、何う高度感が端点で快適な岩登り
樂い。最後はバッカリしてピナクルを目標に登る。
所要時間 2時間

下山コースタイム

涸沢1:45 — 横尾3:30 — 一ノ俣4:05

1/6 天候 霧雨 後曇り

Get up 5:00

T.S 7:30 — 徒歩8:30 — 上高地10:00
天候が悪い為、常念越えを変更し、上高地よりBuuにて下山
このジャク本雨の為、何人かい人が、ホッとした事でしよう。
かくして、カゼ等か何人か出た他、無事に合宿終了。
皆様、ゴクロウさん、まだ涸沢大発見! ついで連れてく食の毒だりと
早いヒコ降りてフロへ入りたいネ。

週延生活のおはなし

新参さんを Leader した。岡田、サト、内ト、金子の大飯食いが皆下山
した後も三回次に残った。Emerson 係はいかれてこの連中の席に定かれて
いよいよ胃薬を一杯たまうかと大分困った様です。その結果、彼は1人2合の米を
食わせてがまこしてもらいました。この飯の量は喜んだのも最初の白だり、
次の日には、同じ量なのたりいのでないかと言う声も傳かれ程

到着、長野の残り火をもって1升五合の飯を他に1升以上の汁と一緒に食べて
動かなく有様、あまりの大食である男、腹が前にせり出し、6峰の稜線の有名な
岩山似ていこう事からタヌキ"タニッキ、ネーム"もらってしまった。
話はまた続く、この男、武智先生からフロイト先生に至る自然応援大な
知識を振り回して、ある夜飯の後二人を話した。

"人間とゴリラはかなり近い向柄にあるから、このアイノコもいるんでは?"

"しかし、馬とロバのアイノコのラバは生殖能力が全然無いんですよ!"

"そりゃ、じゃあ、ライオとヒョウのアイノコ、何、アミタリ、あれと同じだな"

"エー、そうですよ、エート、ライボンで(よ)"

レオボンと言ラベミ所をライボン等と言つたのをから耳ざとい他の4人の者はこれを
聞きとがめて大笑い、そして、この男たちは即座に"タヌキ"と云うニックネーム
を改めて与えられたのです。そして正式名をタヌキンドルハーレムと云ふ。
以後、週延サークルで興奮た、北尾根に奇妙なコールが響き渡った。

"タヌキンドルハーレムニ"と。

彼にとって、その晩は本当に長い一夜であったろう、一晩中皆からかはれたの
だから。

他には、三峰山までもりすごい落石を受けて、ついに死んで一生を得た話や
月明りで"サイテー"をテクテク、"ワビ、サビ、シジミ"の心境で下、左話。

北ホルモンまでお茶飲みに行つ左話、或いは、かの有名な茅野瑞彦のガイド
ブックに書かれてある様に、快適を登り心地の水野クラックをいつも快適に
滑り降りたのが記念すべき20才の誕生日にあつた大変オメでタイ人の
話、花とあるか紙面の都合上、それは、希望者た金子君のオマケとして
もらう事にして、残る数日向は人數が少ないので、かなり有効的に
させた山行である事を記して、この軽い文を終える。

しかし良いコールだとと思いませんか

"タヌキンドルハーレムニ"

食糧係

実施された献立て

	9/29	9/30	10/1	2	3	4	5	6
朝	ミソ汁 ナットウ フクダニ メシ	ミソ汁 ソーキニ メシ	ラーメン	ミソ汁 ソーキニ メシ	1カロニ ソーキニ メシ	ミソ汁 ソーキニ メシ	ミソ汁 ソーキニ メシ	ラーメン 雑穀スイ シューース
昼	パン シューース アメ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	パン アメ
晩	パヤシ ライス	ケイテキ スマッシュ メシ	タキユ ミメシ	カレー ライス	サラダ スマッシュ メシ	シチュー メシ	ゴトタ 煮 メシ	

反省

(1) 夏山合宿等、今度の合宿を通じて、食糧に関して、最も重要なと思われる、カロリーに基いた計画がなされなかった事が反省される。この原因は、「細かい事だ」。しかし「面倒くさい」という考えもあつたうえで、きっと理屈をこねれば、登山に対する、冬山に対する、自主的な態度の欠陥であると言えると思う。食糧計画=山での行動→カロリー計画、というくらいの徹底した観念が必要ではなかろう。

(2) Essen の仕度にとりかかる毎に、数個のボトル箱の中を探ほわり、メチャクチャにかきまわし、そして、時間がかかった。これを防ぐには、Packing の時に、その箱に入れたものを明示し、その書類を最後の Meeting の時に、皆に知らせておけばよいと思う。

(3) 砂糖と塩をまちがえた事。何となく、申しわけありはせんでした。滝谷の方から使わせていただき、「御迷惑をおかけました。且つ、ありがとうございました」とさいました。

(4) シュースの量が少なかった。値段が安かつたので

今度のを使つたが、バラエティーを持たせ、少し多目に買えばよかつた。

(5)ハロンの量は数個の余裕を見て買うよ。と思う。

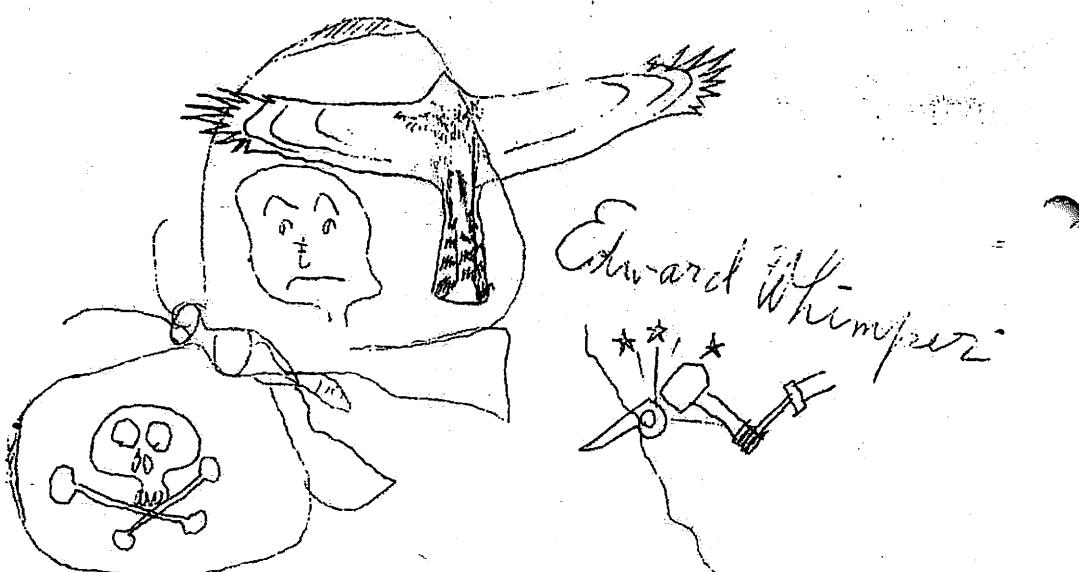
3. その他

確かに今度の合宿の料理はバラエティーに富んでいて、うそかつた。部員の皆様の料理の腕前も相当なものネエ……？

一日の行動が何パーティかに別れ、そのつど、ジユースの小分け用のホーリ袋を集めると苦労した。御協力ありがとうございました。ホーリ袋の数が少なかったようだ。

ラチあけの時に、セーバー、ソシル等が出でても、もし、あれが全然無かった時には、大変さびしくなったろう。どうやら時のための、(好品)は、

Essen計画の時に考えなくてはよがったうが。



○編集後記

もとばかりいた報告書を最初に多く3人でいましたが、登攀後、合宿後の記録の采めオサ悪く、また御覧の様な汚い不整い字でマイナスされて、この様なヨニボ冥い物しか出来ず、折角記録、ルート図を書いて下さった人達、或いは期待してこの書を購いたい人達には全く申し訳ない気持ちです。

しかし、始めて自分で編集し、毎晩自分で切ったカット、自分で作った報告書です。いささか利己的ではありますか良い経験となり、記録を取り次、ルート図の書き方に自分の力の無さを改めて痛感し良い刺激となりました。

これを読まれる方は、私の汚い字で我慢して、記録の取り次等を僕の悪い所を参考にして下されば、また少しごとにこめた乗っているルート図等が、見分りられ今後の登攀の参考になれば大変幸せです。

なお、記録を書いてくれた人、特に1年生の人達は、自分の感想と共に登路等の説明をもう少し詳しく書けた様にして下さい。

最後に、作業が遅くなれた事と、重ねて記録の集めの不整いをおわびします。

訃 サ上。

私は山にあいて道を見いだし、頂へと直す事こそ、それ自体に大きな喜びを感じる。先駆者たちのつくられた細かい道は、僕がそれをたどって頂に達した可能性を教えてくれたのである。頂への懐かれはその道をけんめいて探し求めつつ、自らの力によってその度に立った場合、強い欲求と満足とに変る。それは自己の行為に対する喜びであった。

強い登攀への願望、未知の登攀への不安からいた人とする力、そしてそれへの熱心な実行は實に人間的な可能への激情なくしてはなれない。山へのその激情は実行の可能につよい根を持ち、登攀の困難さによってかき立てられる。

登攀がより困難であり、その不安がより大きほど、激情がより強く、有された行為はより大きい喜びを与える、自己の完成への段階はより高まるものとなるであろう。

— 小川登喜男著、アルピニズムより —

作製 信大伊那松木小兵部
印刷所 信大文理学部
発行所 23番教室後
山岳部新研究室